



福島ファイヤーボンズ

子供たちが安心して運動できる環境をとの想いから、バスケットボールスクールを開校するなど地域に貢献。

福島ファイヤーボンズが誕生したきっかけは、当時、東京電力福島第一原子力発電所事故による放射線の影響を受け、多くの小・中学校が体育など校庭での活動を制限しており、「原発事故による運動不足から、『肥満傾向』と判定される子供が増加」というニュースがあったからです。そこで、子供たちが安心して運動が出来る環境を作れないかと考え、バスケットボールスクールを開校しました。

そして、バスケットボールをする子供たちに夢を与える想いから、プロバスケットボールクラブ「福島ファイヤーボンズ」を創設しました。『スポーツで福島を元気に』という理念で、郡山市をホームタウンとして試合をさせて頂いています。チーム設立後は、バスケットボールクリニックや挨拶運動など、学校訪問や地域イベント（うねめ祭り等）にも参加させて頂いております。今後もプロスポーツを通して、地域の方々と共にクラブが発展し、トップカテゴリーでもあるB1への昇格を目指していきます。



東北フリー布莱ズ

震災後、被災して使用できなかったリンク、2年ぶりに地元でプレーする喜びをファンとともに実感。

2010-2011シーズンの3月11日東日本大震災のその時、東北フリー布莱ズはプレーオフファイナルまで進出。翌日のアニサンハルラ（韓国）との決戦の地、磐梯熱海アイスアリーナで公式練習が始まる直前でした。福島では最大震度6強を記録。衝撃的な大地震に動搖を抱えたまま、安全を確保するためチームバスで待機する中、配信されていたニュースは、押し寄せる津波の映像など信じられないものばかりでした。プレーオフは中止となり、ハルラと同時優勝となりました。2008年に発足したチームにとって初の優勝でしたが、喜びを感じる余裕はありませんでした。そして2013-2014シーズン11月16日、被災してリンクが使用できなくなっていた福島で、2年ぶりに試合が開催され、そこにはチームが戻ってくることを待ちわびていたファンが客席を埋め尽くしていました。会場には涙を流している方も居り、またこの地で試合が出来る喜びや改めてアイスホッケーやフリー布莱ズの存在の意義や大切さを感じさせてくれました。



地域を支えてきた4チームが想う 東日本大震災からの歩み、そして未来ー。

2011年の東日本大震災という大きな困難を乗り越え、今までスポーツを通して市民に夢や希望を与え続けてきた県内を中心に活躍する4つのトップスポーツチーム。東日本大震災からこれまでの歩み、そして今後の目標などそれぞれの想いについてお聞きしました。



DENSO AIRYBEES



デンソーエアリービーズ

地域との一体感を創りたいとの想いから様々なイベントに参加。競技を通して地域に愛されるチームづくりを目指す。

1972年創部。1996年にチーム名を現在の『デンソーエアリービーズ』に改称。『快活なミツバチたち』という意味で、コート上で躍動する選手たちを蜂にたとえ、速く鋭い攻撃で日本バレーボール界の女王を目指しています。また、2017年11月には郡山市とホームタウンパートナー協定を締結。翌年より中学生女子を対象にしたバレーボールスクールを開校し、地域貢献に励んできました。その後、さらなる地域との一体感を創り出すために、夏の『うねめまつり』や『ビール祭』にも参加しています。様々なイベントや競技を通して郡山の皆様に親しまれるチームとなり、愛されるチームとなるよう全力で取り組んでいきます。

田村市にあるデンソーフ島の工場が避難所として活用されました。
震災直後 3月14日～4月14日
約1,800名の方を受け入れました。



福島レッドホープス

福島県初のプロ野球球団として誕生、「All for FUKUSHIMA」の想いを胸に。

福島レッドホープスは、その前身である「福島ホーブス」が福島県初のプロ野球球団として2014年に誕生したことから活動をスタートしました。東日本大震災による子供たちのスポーツ環境、県民の皆様の生活、企業の方々の活動など、広域・広範囲にて大きな影響が未だ改善されていない時期に、野球で福島を元気にしていきたいとの想いから創設の運びとなりました。球団のスローガンは「All for FUKUSHIMA」です。チームは今年7年目のシーズンを迎えようとしています。毎年郡山市を中心に県内十数か所にて公式戦を開催し、試合以外にも野球教室や地域イベントなどに積極的に参加していく中で、常に「福島のために何ができるか?出来ているか?」を自問しながら活動を続けております。福島レッドホープスが所属するBCリーグには、関東、信越、北陸地方の12球団がふるさとのプロ野球球団として競い合っています。我々は、東北唯一のチームとしてその頂を目指して戦ってまいります。



FUKUSHIMA RED HOPES



#21 SFキャプテン(二本松市出身)
菅野 翔太選手

今も鮮明に残る恐怖の記憶、震災から10年経った今も復興への道のりは遠い。

東日本大震災から10年が経ちますが、今でも当時の記憶は鮮明に残っています。当時、仙台の大学に通っており、練習が始まって1分後に揺れが襲ってきて、急いで外へ避難しました。外に出ると様々な音が聞こえ、今まで味わったことのない不安感や恐怖心に襲われました。しばらくの間は部活の仲間たちと支え合いながらなんとか乗り越えることができましたが、家族や地元の友人のことが心配で気が気でない日々を過ごしたことを覚えています。10年経った今でも復興には程遠いですが、僕たちにできること「バスケを通して県民の皆様に勇気や笑顔を届けること」を地元選手として率先して行っていきたいと思います。少しでも早い福島県の復興を願い、僕は全力で皆様の前でプレーし続けます。



バスケットボールを通して希望や笑顔を届け、SNSなどで福島県の魅力を発信したい。

東日本大震災が起きたとき、僕は実家の2階にいて、立っていられないほどの揺れに襲われ、家の物がたくさん崩れ落ちたり、壁には亀裂が入ったりと今までに体験したことのない恐怖で震えていたのを今でも鮮明に覚えています。また、去年9月に東日本大震災・原子力災害伝承館を訪問したとき、まだまだ復興ができていない現状を知りました。

現時点でも避難者はたくさんおられ、避難指示が解除されても帰還率が低い自治体が多くあります。復興までの道のりはまだ遠いと思いますが、少しずつでも笑顔で福島県に戻ってくる人、福島県っていいところだなと思ってくれる人が増え、震災前よりも豊かな生活に戻ることを心から願っています。福島県出身選手だからこそ伝えられることがあると思います。バスケットボールを通して福島県の皆様に元気や希望、笑顔を届けることはもちろんですが、福島県の魅力をSNS等で伝えていきたいと思います。震災から10年、輝きのある福島県を取り戻すために自分にできることを精一杯頑張っていきます！



#11 SG(郡山市出身)
山内 翼選手



#6 セッター
田代 佳奈美選手

震災の事実を知り愕然としたあの日、これからも地域と支え合いとともに成長したい。

古川学園高等学校(宮城県)を卒業していた私はニュースで震災のことを知り、友達・先生・たくさんの方々が頭に浮かびました。しかし、連絡をしたくてもできなかった自分がいました。たくさんの方が被害に遭われた中、自分たちは普通の生活ができている事に不安を感じた事もあります。被災地でバレーボール教室をする機会があり、画面越しでしか見たことがなかった風景を現地で見た時は同じ国で起きたとは思えないほどの衝撃で言葉が出ませんでした。そのような状況でもバレーボール教室に来てくれる小・中・高校生たちが笑顔で楽しんでいる姿を見て、正直胸が痛んだのを覚えています。今も元の生活に戻る事ができない方もいる中、私は社会人12年目でバレーボールを続けることが出来ています。年々感じる事も変わってきたが、目指す所は変わりません。たくさんの方々にバレーボールの魅力を知って頂き、自分のプレーを見て面白いと思ってもらえるようなバレーボールをするという目標達成に向けて、感謝の気持ちとバレーボールを楽しむ気持ちを忘れず、頑張っていきます。



#16 ミドルブロッカー
横田 真未選手

震災での経験はこれからも受け継いでいくことが大切、バレーボールを通して地域の力になりたい。

震災のあった時、私はまだ中学生でした。その後、古川学園高等学校(宮城県)に入学してから地震による被害の状況を目で見て、肌で感じました。同級生からは、実際にデパートの屋上に逃げて津波を目の前で見た話などを聞きました。今いる場所・東北で起きた震災をより身近に感じ、この場所でバレーボールをすることの意味や、自分には何ができるかを考えようになりました。そして、ただ全国大会で優勝するという結果だけでなく、何のために、誰のために頑張るのかが大事だということに気付きました。今後の目標は、バレーボールを通して元気や勇気を与えるように、試合やSNSなどで自分たちの姿を発信していくことです。今はコロナ禍で、実際に試合会場に足を運んで観て頂くことが難しい状況ではありますが、リモート配信でも誰かの心に響くようなプレーや明るいチームの姿を見て頂き、少しでも笑顔になって頂きたいと思います。これからも、バレーボールを通して多くの人の力になれるように頑張ります。



No14 FW
田中 豪選手

今も深く刻まれる震災当時の記憶、震災の教訓を胸に未来に向け日々奮闘。
2011年3月11日、私たちはリーグ優勝を決める試合を行う為、磐梯熱海アイスアリーナにいました。あの時の光景は脳裏に焼き付いています。あれから10年、復興に向けて日々奮闘する多くの方がいることを私たちは忘れていません。郡山の明るい未来の為に支え合い、助け合い前に進んでいる市民の皆様をいつも応援しています。フリーブレイズはアイスホッケーというスポーツを通して、微力ながら皆様の支えとなれるよう頑張ります。郡山の復興を心から願っております。



監督兼
(株)福島野球団 代表取締役
岩村 明憲監督

震災3年後に訪れた転機、大きくなる復興への想い。

10年前の東日本大震災の発生時に、私は東北楽天ゴールデンイーグルスに現役選手として所属しておりました。チームは開幕前のオープン戦のため関西に遠征しており、兵庫県にて多大な災害規模と深刻な被害を知りました。選手及びスタッフは仙台近郊に居住し、家族が残っている者も多く安否確認もままならない状況でした。発生翌日以降は、オープン戦の中止、開幕の延期などが決定しましたが我々には仙台に帰る交通手段がありませんでした。家族や友人たちとの再会を切望するも叶わず、仙台に帰ることが出来たのは震災から一月後の4月11日でした。その日のことは今も忘れられません。やっと戻って来ることが出来た我々の目の前にあったのは、帰宅出来的安堵感ではなく震災の凄まじさ、被害の甚大さでした。ある者は声を無くし、ある者は涙してただひたすらに被災地を見つめています。震災から3年後私に転機が訪れました。福島県初のプロ野球チームへの選手兼任監督へのオファーでした。私自身が震災からの復興に役立てるかも知れない!という思いが自分自身を突き動かし今に至っています。監督として球団経営者として、子供たちの夢を繋ぎ、県民の皆様に希望を与える、関わる全ての方に笑顔を届けるために邁進してまいります。



No21 FW
山本 和輝選手

フリーブレイズのホームである郡山をスポーツの力で元気にしたい。

東日本大震災からもうすぐ10年が経とうとしています。私もあの日のことは今でも忘れません。この震災で被災された方々、命をおとされた方々にご冥福をお祈りいたします。フリーブレイズとしても微力ながら市民の皆さんにスポーツを通じてこれからも勇気と希望を与えられるチームでありたいと思います。またコロナ禍と大変な時代ではありますがこの時を皆さんと乗り越えていけるものと信じております。フリーブレイズのホームである郡山で試合を開催し市民の皆さんとこの時を乗り越えていきたいです。頑張ろう東北!!

地元福島にプロ野球チームが出来ると知り帰省を決意、地域との交流の中で知る震災の事実。

東日本大震災が起きた日は、私の中学校の卒業式でした。高校でも野球を続けたく野球部に入部するつもりでしたが、入学式が執り行われたのは1か月遅れのゴールデンウィーク明けで、その間は全く野球が出来ないでいたのを思い出します。大学に進学し野球を続けていた私に、ふるさと福島にプロ野球チームが出来るとの情報が入ってきました。「大学を卒業しても野球を続けるかもしれない」との思いを抱いた私に迷いはありませんでした。福島レッドホープスでの現役時代は、これまで以上に震災の事実や復興の意識を身近に感じる事が多くなりました。試合や野球教室、イベントを通じて県内様々な所に出向いて、地域の方々との交流を重ねることで復興に対する想いと願いが強くなり、福島のために出来ることを模索しながらの現役生活でした。昨年引退を決めた私はマネージャーとして球団に残ることにしました。

これからは、選手たちに震災の記憶や復興に対する想いを繋ぎ、「All for FUKUSHIMA」を今まで以上にチームに浸透させるべく努力していきたいと思います。



2020年引退 現チームマネージャー
(郡山市出身)
大河原 雅斗選手